

Title	遠藤周作の『深い河』に見られる日本人の死生観の多角的研究
Author(s)	Narsimhan, Ranjana
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/832
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	ナラシマン ランジャナ NARSIMHAN RANJANA
博士の専攻分野の名称	博士（言語文化学）
学位記番号	第 22297 号
学位授与年月日	平成 20 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 言語社会研究科言語社会専攻
学位論文名	遠藤周作の『深い河』に見られる日本人の死生観の多角的研究
論文審査委員	(主査) 教授 尾上新太郎 (副査) 教授 米井 力也 教授 高橋 明 准教授 松村 耕光 教授 嶋本 隆光

論文内容の要旨

遠藤周作『深い河』:『深い河』は、遠藤周作の最後の小説で、1993 年、講談社から出版された。本作品は、それぞれ辛い過去を背負っている日本人の観光客がインドへのツアーに参加するというインドが舞台になった小説である。その中で、インドの聖地ヴァーラーナシリとヒンドゥー教の女神チャームンダーが中心になっていると思われる。本作品の前半において、それぞれ登場人物——磯部、美津子、大津、沼田、木口——の過去が描かれている。大津を除いて、他の登場人物の過去がそれぞれの「場合」という形になっている。小説の後半において、彼らはインドへのツアーの形で結ばれ、また、添乗員の江波も登場する。

研究の目的:本研究の目的は、『深い河』に見られる日本人の死生観を明らかにすることである。そのため、まず、本作品において、それぞれ登場人物を中心にした死生観について何が問題視されているのか、ということ进行考察する。本作品の先行研究の中で、「転生・復活」「善・悪」「愛」「作者のキリスト教観」の観点からの分析が見られる。しかし、先行研究には、本作品に見られるヒンドゥー教徒と日本人の死生観の比較の観点と、『深い河』における女神チャームンダーのイメージの考察がないようである。したがって、私の観点は、本作品に見られる日本人の死生観の多角的研究であるが、その中で、小説に出てくるヴァーラーナシリや女神チャームンダーに見られるヒンドゥー教徒の死生観を考察することである。また、この小説の中のヒンドゥー教の女神チャームンダーの捉え方が、作者の死生観、あるいは、日本人の死生観を反映したもの、と考えられるので、それを考察しながら、この女神に対する遠藤の理解の程度を調べる。最後に、作者の宗教観を考察して、『深い河』に見られる日本人の死生観を明らかにする。

論文の要約:本作品は、登場人物の磯部の過去を描きながら、彼の癌になった妻の話からはじまる。死に際、妻は、自分が生れ変わるから探してくれないか、と磯部から約束を取りつけた。妻の死後、磯部は、インドの聖地ヴァーラーナシリの近くにある村で日本人として前世を生きだした少女がいるという情報を手に入れた。その理由で彼は、生まれ変わった妻を探しにインドへ行くことにした。

磯部のインドへの旅行は転生した妻を探すためのものであったが、その旅行は人生を理解するための探求になっていった。転生した妻が見つかる可能性が失われて、磯部には妻への思い出だけが最も価値あるものに思えた。そして、

妻を失ってから、初めて妻の価値、妻の意味が分かった気がした。彼が人生の意味を分かったのは、自分の心の奥底にあるものを見つめ始めてからであって、妻の愛を実感してからである。磯部が実感した愛が、妻の転生を暗示するというのである。同時に、その愛の実感は磯部の新たな人生をも暗示していると考えられる。

成瀬美津子という登場人物は、磯部の妻が入院していた病院のボランティアであり、磯部の妻を看病していたのである。大学生時代に、美津子は空虚感と心の奥に潜んだ悪への暗い衝動の中で、大津を誘惑することにした。彼女の行為は、信者であった彼をではなく、彼の信じている神をからかいたいという、いささか子供っぽい気持ちから出発したのである。したがって、彼女は彼に神を裏切らせることにする。美津子の場合、彼女は神の存在を否定することによって一つの問題が見られる。遠藤は、神の存在を否定することが、その存在を肯定することでもあり、その存在を意識することでもある、と言っている。美津子が小説の終わりごろ、ガンジス河に沐浴しながら祈るということは、作者の前述の考えをあらわしている、と考えられる。

美津子を通して話題になる、心の奥底にある悪の存在はもう一つの問題である。彼女は長い間、自分の中にある悪への衝動を認めて苦しんでいた。しかし、慈愛の姿と同時に狂暴そのものの姿をあわせ持つヒンドゥー教の女神カーリーを見て、本質的に無意識の奥底に善も悪も存在しているということが理解できた。

美津子が誘惑して棄てたキリスト教徒の大津は、彼女と同じ大学で哲学科の学生だった。彼は、美津子に棄教させられたが、彼女に棄てられて、また自分の宗教にもどった。本作品において、美津子の結婚話のうちに、大津はリヨンの神学校に入ったということが知らされ、また、彼女の過去において、彼はインドのヴァーラーナシリにいと知らされる。ヴァーラーナシリで、見棄てられた人々が救いを得るように、大津は彼らをガンジス河まで運んでいる。大津は「あなたは、背に人々の哀しみを背負い、死の丘までのぼった。その真似を今やっています」とイエスのことを思いながら、自分の人生とイエスの人生を同一視しているようである。

大津を通して、西欧人と東洋人のものの考え方の違いが問題視されている。東洋人の大津に、ヨーロッパ人と同じように何ごともしっかり区別したり分別したりすることはできない。これは遠藤がよく問題にする一つであるが、彼によれば、西欧人の考え方はあまりにも極端であり、日本人にとって、善と悪をはっきり区別するのが難しいということである。遠藤は、はっきり区別しているうちに、もっとも本質的なものが見落とされるのではないだろうか、という疑問を大津に言わせた。

作者の宗教観、つまり、神の存在は何を意味するのか、ということは大津の信仰において明らかになる。神は存在というより、働きである。また、神は母のように、優しく愛のぬくもりであって、すべてを包みこみ、愛してくれるものである。神の存在を「働き」として認めているのは、作者の神観である。大津が信じる神は、何の区別もせず、すべてを受け入れる愛の働きである。彼はガンジス河にもその愛を認め、愛の河はどんなによごれた人間もすべて拒まず受け入れて流れていく、と思った。

童話作家の沼田は、幼少時代を、当時、日本が植民地化していた満州の大連で送った。小学生の時、沼田の両親の仲が悪くなり、別れ話が持ちあがった。あの頃、彼の哀しみを理解してくれたのはクロという犬だけであって、クロは、沼田の同伴者であった。彼は、大学時代から童話を書くことを生涯の職業として選び、その動機を与えたのはクロの思い出だった。その後、自然や動物は、彼の人生に重要な影響を与えた。特に、彼が死ぬか生きるかの病の時、身代わりのように死んでくれた九官鳥は中心的となっている。本作品において、この「身代わり」の話は問題にされている一つである。彼は死んだ九官鳥のかわりとも言える別の九官鳥を放つためにインドへのツアーに加わった。沼田を生かすために九官鳥が死んでくれたということは、イエスの復活のことを暗示している、と考えられる。遠藤文学に出てくる犬や鳥などの眼がイエスの眼を象徴している、ということは、作者自身が言ったことである。沼田の場合、犬や鳥などが、彼を支えてくれたものであって、遠藤の言う「神はだれか人を通してか何かを通して働くわけである」という信仰が示されている、と考えられる。

元軍人の木口は、戦争の苦しみを背負ってきた登場人物である。彼の戦友、塚田の話を通して、人間の行為を善・悪にはっきりと区別して、裁くことができるのだろうか、ということが問題の一つである。神は裁きを与えるものであるか、あるいは、罪・悪を行った人は救われるかどうか、というような問題である。戦争中、ビルマのジャングルで、マラリヤで倒れた木口を助けるために、塚田は、知らずに死んだ兵隊の肉を食べてしまった。塚田は、その肉が南川という兵隊の肉だったということが分かって、その苦しみに耐えず、病気になって死んだ。木口は、塚田と戦争

中失った戦友のために、法要を願って、インドへのツアーに加わった。彼は、ガンジス河畔で、塚田が彼を助けるために人肉を食べたが、それは慈悲の気持だったので、塚田が救われる、ということを感じた。ガンジス河が象徴しているように、神というのは、罰するものではなく、すべてを受け入れるものであり、愛してくれるものである。また、塚田が救われて、すべてを愛してくれる大きな生命に戻れるということは転生を意味する、と考えられる。

最後に、本作品において、添乗員の江波は、インドのガンジス河やヒンドゥー教の神々のことをツアーの参加員に説明すること、となっている。江波に説明されたとおり、ヴァーラーナシは聖地であり、ヒンドゥー教徒が解脱を願って「死ぬために行く」町でもある。ただし、それだけではない。伝統的に、ヴァーラーナシは昔からギヤーナ (*Jnāna*) という真智・知識を得るための探求力とも関連している。ギヤーナは、精神的な学問、また、万事の根本を理解するための探求力を示している。したがって、ヒンドゥー教徒がヴァーラーナシへ行くのは、死ぬためや解脱を願うためだけではなく、生・死の根本、宗教の根本を理解するためでもある、と言える。

ヒンドゥー教において、生・死を象徴する一人の女神はチャームンダーである。遠藤周作はこの女神を『深い河』に登場させ、ヴァーラーナシに位置づけたのである。江波の説明という形において、この女神は、インドの貧しさ、あるいは、インド人が長い間耐えてきた苦悩、病気などの象徴であり、そして、この女神は従者たちと共にその苦しみに耐えている、となっている。作者はこの小説の中で、チャームンダーの像に見られる墓場という背景やジャッカルに食べられている人間の死体にふれているが、〈死〉と関係があるこの描写をインドの貧しさのシンボルの問題、と考えているようである。伝統的に、この女神のイメージを通して伝わることは、死とは、出発点、つまり、最初の状態であり、生とはその中から誕生したもので、プラクリティ (女性原理・生物原理) という女神が活性化したものである、ということである。女神が持っている剣は、解脱の象徴であり、カルマ (業) とのつながりを断つための武器と理解されている。言い換えれば、ヒンドゥー教の一つの思想は、輪廻転生はカルマによるものなので、そのカルマとのつながりを切れば、解脱できる、ということである。

添乗員の江波はチャームンダーを説明する時、この女神がもっている武器や人間の首に一切ふれなかった。それにふれずに、彼は登場人物の注意を別のことに引きつけようとしたと考えられる。それは、女神の萎びた体であり、その体に見られる蠍などである。ここで問題点は二つ考えられる。一つは、遠藤周作が実際に女神チャームンダーの像を見た時、『深い河』に説明されたような印象を受けたのかどうか、という問題である。もう一つは、何らかの理由で、意識的に女神チャームンダーを説明する時、「受難の女神」という描写にしたのかどうか、という問題である。この小説に出てくる女神チャームンダーの説明が、実際に作者の受けた印象であれば、それはヒンドゥー教における女神チャームンダーの伝統的な説明とは違う。しかし、もし作者が意識的に女神チャームンダーの描写を「受難の女神」というような説明にしたとすれば、それは、『深い河』に書かれているとおり、小説の中の日本人は、女神という言葉から、『深い河』に描かれている寺に見られる怖い姿の女神より、もっと優しいものを期待しているからであるだろう。本作品に限ってみれば、死を象徴する怖ろしい姿の女神、あるいは、何本かの手に武器などをもつ女神のイメージは烈しいと思われ、日本人の宗教心理にあまり合わない、と考えられる。したがって、本作品において、チャームンダーの象徴から、この女神のもっとも母らしい面がとらえられ、醜くて病気に耐えていても、母としてインド人を愛してくれる女神として描かれた。

論文審査の結果の要旨

本論は、主として、次の三章からなる。

第一章 登場人物を中心にした『深い河』における死生観の問題

第二章 ヒンドゥー教の死生観

第三章 作者の宗教観・神観

第一章では、『深い河』の主な登場人物－磯辺・美津子・大津・沼田・木口・江波 (江波は、バスツアーの添乗員)

一のそれぞれについて、インドとの関わりが詳細に分析される。また、それぞれのインドでの体験が、詳細に分析される。(ただし、大津だけは、ツアーとは無関係に、インドに行く)。

江波は、インドに関する相当深い知識を持っている。この江波から、彼らは、ヒンドゥー教の女神・チャームンダーの話聞く。女神・チャームンダーは、痩せている。グロテスクな印象を与え、皮膚の一部は病に侵され、体にはサソリがはっている。そういう女神・チャームンダーの像を、あるヒンドゥー教寺院で、一行は見せられる。キリスト教の女神とは似ても似つかない、グロテスクな女神だった。ただし、また、母親らしいイメージも漂わせていた。

江波によれば、女神・チャームンダーは、インド人の生活、生存上の苦悩を表しているのである。で、また、女神・チャームンダーは、そういうインド人に即して、救いを垂れているのである。これらは、また、作者・遠藤の女神・チャームンダー観でもあろう。

こういう女神・チャームンダーに対して、論者は、徹底した考察を行う。要するに、遠藤の女神・チャームンダー理解の程度を開明しようとしているのである。そのためには、ヒンドゥー教の女神・チャームンダーが正しくはどういうものかを厳密に明かす必要がある。このところに、論者の真骨頂が認められる。その問題意識もさることながら、丁寧、かつ慎重に、考察の歩を進めている点、高い評価が与えられる。考察は、資料の点で、随分困難なものだったろう、と推察されもする。

第二章では、また、聖地・ヴァーラーナシについての考察もなされる。このヴァーラーナシに関する歴史的考察、また、ガンジス河ほかの河川に関する信仰の研究等も、説得力のあるもので、評価に価するものである。

遠藤の考えるキリスト教は、ヨーロッパ型のキリスト教とは相違する。それは、ヨーロッパのキリスト教のように、善悪・美醜・生死等を、厳然とは区別しない。これは、東洋人の宗教観の問題と言える。こういう遠藤の宗教観の問題、乃至、キリスト教観の問題を、論者は、彼の女神・チャームンダーの理解を通して、考察しているのもある。斬新な方法での遠藤の宗教観の理解と言え、評価に価する。

遠藤は、日本にキリスト教を定着させようとした人だが、その困難さも熟知していた。そもそも、宗教観が、西洋と東洋とでは、根本的に違っているのである。それで、日本人に適合したキリスト教を作ろうとした。同伴者・イエスという考えは、そのことと関係する。もっとも、このことは、西洋流のキリスト教観と、本質的に相違するだろう。こういったことを、論者は、説得力のある形で論述している。

ところで、日本型・東洋型のキリスト教を追及していた遠藤は、宗教の本質を考えるようにもなった。この点にも論者は有意識的で、宗教の本質を、遠藤に即して、追及している。

論者は、神の存在を、絶対的超越的実体的なものとせず、愛という働きの点で捉えるというのが、遠藤の宗教観の本質と言っている。結論は、特に珍しくはないのだが、女神・チャームンダーに対する遠藤の理解と絡めて、論をなしている点、評価に価する。日本語の使い方の点で、多少問題になる部分もある、とされる。だが、総じて、高度の論文と、私たち博士論文審査委員は、全員一致して、判断した。かかる次第、最終試験共々、博士論文としても、本論文を合格とした。